

2021/3/20-2

(うと Q 世話し「人類史大絵巻最末端」の崖っ淵)

「祇園精舎の鐘の声

諸行無常の響きあり

沙羅双樹の花の色

盛者必衰の理をあらわす

奢れる者久しからず

只、春の夜の夢の如し」

之は、確か中学の時に習った文です。

とても印象的だったので覚えておりました。

しかしこの理に倣えば、豪族や将軍、国家や民族のみならず、人類も同じ理の下にあってもおかしくはありません。但し、時間的尺度のスケールが大分違いますが。

その時間的尺度のスケールをグンと伸ばしてみると、嘗て地球上を跋扈し栄耀栄華を極めた恐竜。

まさかこの天下無敵の巨大生物が滅びるとは誰も考えもしなかったでしょう。

が、それにも拘わらず、一時を頂点として、隕石衝突か何かの突発事態で気候変動が起こり、餌となる草が減少し、暫くの後に絶滅してしまった事実があります。

だとすれば、地球の長い悠久の歴史の中で、我々人類もそうになってしまう可能性があると思われれます。

最近ニュースで気候変動問題（地球温暖化）と我が国の風水害、南海トラフ首都圏直下型地震の予測等とコロナウィルスの話がそれぞれ独立した話として別々に報道されておりますが、自分にはその根っこにあるものは「全く同一起源のもの」なのではないのか？という気がしてなりません。

要するに数的に巨大化しすぎた人類へのバッシング、押し戻し、間引きの始まりなのではないのか？という予感です。

自分で言って自分で震える程の恐ろしい予感です。

天地運行のメカニズムというのは

「完全に人類からは独立していて、必ずしも人類の都合に合わせて作られている訳ではない。人類の都合に忖度を全くしていない」

というのが自分の予感の元になっております。

この人類の都合に全く忖度しない「自然の猛威」に対して、古代から人類は「お祈りをして諫めたり、戦ったり、ねじ伏せたり」して参りましたが、産業革命以降は最後の文言にある「自然のねじ伏せ」が多くなり、直近では「破壊してでも利得を得る」様になってしまっている気がします。

それに対してとうとう「自然界が怒りだした」

結果が、前述の気候変動、風水害、巨大地震、ウィルス渦と言う形を取って、様々な巻き返

しを、図り始めた。

「最早「警告」の域を脱し、封じ込め掃討作戦に打って出てきた」の感があります。

であるにも拘わらず、この実際の構図に気づいたとしても、相変わらず、大学生の頃に読んだ西域小説の中の

「大河の氾濫に対して弓矢、槍を持った兵馬を差し向け、その大河の反乱を平定しようとしたが、結局はその度毎に兵を失うだけの愚を犯した」將軍同様、今もその愚行を繰り返しているのではないか？

という気がします。

その愚を犯さぬ為には、何よりもまず「発想のコペルニクスの 180 度大転換」が急務ではないでしょうか？

何度も申し上げて参りましたが 2030 年、その最大猶予期限迄「あと 10 年」

我々は今「人類史大絵巻」最末端の「大崖っ淵」に立たされているのではないのでしょうか。